

『エドガ・ハントリー』

——迷路としての生——

高 島 清

『エドガ・ハントリー』はエドガのメアリ宛の27章からなる手紙と、サースフィールド宛の2通の手紙およびその返信としてのサースフィールドの1通の手紙から成立する、書簡体小説である。メアリは、エドガの婚約者である。彼女の兄ウォルグレイヴとエドガは親友同志であったが、物語りが始まる時にウォルグレイヴはすでに何者かによって殺害されている。

第1章冒頭で、エドガは、自分がやっと、メアリの「要請に応じ¹⁾」て、「一連の事件(5)」についての報告が出来る精神状態になったことを明らかにする。しかしそう言った後すぐに、自分は「不安状態と震えからいくぶん解放された」にすぎなく、「現在でも」「心の動揺が、このような仕事をするのにふさわしくらいに治まってい」るかどうかについては確信が持てないのだと言う。しかし、事件の記憶が鮮明なうちに語るほうが「事件や動因」が十分に伝わると判断して、あえていまペンを執ることにしたと述べる。そしてさらに続けて、現在の精神状態から判断して、語る内容に「不明確さと混乱」が伴うやもしれず、また語るうちに、事件当時の感情が甦ってきて、「秩序と首尾一貫性」を失うかもしれないと不安を漏らす。(5)そして、出来ることなら直接話したいのであるが、メアリが「遠く離れた所」にいて自分の所に来ることも出来ず、と言って、エドガ自身が「現在の場所を離れることもままならず」、「手紙による以外」、事件を「伝える方法がない」のだと弁明した後、本題に入る。(6)

本題である「一連の事件」は、エドガの体験したものである。そしてその体験は、ウォルグレイヴ殺害事件以降のものである。エドガがメアリと別れてから「過ぎ去った期間」は「短い」ものではあるが、その期間内に起った事件は、エドガの「魂」を「動揺」させ「驚愕」させたのである(6)。最初の事件は、メアリと別れたエドガが伯父の家に帰る途中で起る。伯父の家まで10マイルの所まで来た時、エドガは、ウォルグレイヴ殺害事件を思い起す。「殺人犯」と「殺害の動機」について考える(7)。そして、ウォルグレイヴの特徴である「敬神の念」、「慈悲心」、「温和な態度」を想起すると、「内気で控え目な性格のため友人は少なかった」にせよ、彼に「敵がいることなどは考えられず」、したがって、人に怨みを買うようなことはないかと改めて判断する(7)。

しかし、このように非の打ちどころのないと思える人物が、エドガとメアリ相方に「悲しみ」と「復讐心」そして「謎を解き明したいという強い欲求」を引起させるような「血まみれの、謎の悲劇的結末」を迎えるのである(6)。ウォルグレイヴが殺害されるのは、「暗い嵐の夜(7)」である。明朝まで旅を延期するようにというエドガの「しつこい願い」にもかかわらず、ウォルグレイヴは「説明し難い頑固さ」で「徒歩で出かけるという決意」(7)を翻すことがなかったのである。この行動と態度はエドガの理解するウォルグレイヴの性格とは矛盾する。「内気で控

え目な性格」の人間が時折「説明し難い頑固さ」を見せるということは現実にあるとしても、「暗い嵐の夜」にどうしても出かけなければならない用件そのものの内容は大いに疑わしいものである。しかし、この用件の内容はまったく説明されることはない。そのため、ウォルグレイヴの死の原因は必要以上に謎めいて見える。しかし、この謎がまったく見かけ上の謎にすぎないことは、27章で、白人により土地を奪われたインディアンの白人に対する怨みの対象として、たまたまウォルグレイヴが犠牲になったということが判明することによって、明らかになる。「暗い嵐の夜」、ウォルグレイヴに「説明し難い頑固」な態度をとらせた謎めいた用件はまったくそれ自体の機能をはたしてはいないのである。不必要な状況設定というべきである。

「内気で控え目な性格」の持主ウォルグレイヴが目立った行動をするのは、「宗教と道徳(131)」に関してである。彼の「もっとも若い時の信条」は「必然性を至上のものとし、物質がすべて」だとし、(131)「広く信じられている魂と肉体との区別を論破」し、「死の前と後の人間の精神状態に関連性を想定する説を解体させる」ものであった(131-32)。これは機械的唯物論であり、彼はこの思想を確信し、熱心に「広めよう」としたのである(132)。このようなウォルグレイヴは「内気で控え目な性格」の人間が時折示す一種の狂信的側面として理解出来なくはない。『ウィーランド』のセオダー・ウィーランドもこの種の人間である。

しかし、14章でウェイマスなる人物が突然登場して、ウォルグレイヴとの親交をエドガに告げる時、我々は大いにとまどうのである。富を求めて「世界中の海と陸(154)」へ向かう冒険家ウェイマスから信頼されて「7500ドル(144)」もの大金を預っていて、そのことはもちろんのこと、ウェイマスとの関係についても一切語らないまま、死ぬまで薄給の「授業料免除の黒人学校の教師(143)」であったウォルグレイヴは、二重の人間関係を持った謎の人物としか言いようがない。二人がどのようにして知り合ったかは明らかにされないが、ウェイマスの「3年前にはウォルグレイヴ同様に貧乏」であり「7年間公職についていた」(144)という言葉から推測すれば、彼はウォルグレイヴと職場が同じだったあるいわ、若い時期、思想上の仲間だった可能性もなくはない。しかし実の妹にも、親友のエドガにもまったく知られない交遊関係があったということ自体が普通ではない。²⁾

謎であるのはウォルグレイヴだけではない。エドガ・ハントリーこそ、真の謎の人物である。突然登場するウェイマスがエドガに与える影響は絶大である。エドガは2人の妹と共に伯父に寄食する身である。伯父の息子はエドガ兄妹にとっては「他人であり敵(156)」であって、伯父が亡くなれば3人は追い出されることは必定である。婚約者メアリとの結婚は、2人が「貧乏である限りは実現し得な(155)」いものである。しかしそれを可能にしたのが、ウォルグレイヴがメアリに遣した8000ドルの金である(このうち7500ドルが自分に所属するものだとウェイマスは言う)。愛だけで結婚生活が可能であるというのは幻想にすぎないとはいえ、エドガの金銭感覚は特異である。まず第一に、彼は、結婚生活の経済的基盤を全面的にメアリが受ける遺産に求めるばかりか、彼の妹2人の生活もメアリに保証させようとする。結婚を「喜びの感情を抱いて待ち望んでいた」理由は、2人の幸福のためだけではなく、結婚によって、妹2人に「住家」を与えることが出来ると思ったからであるとエドガは言う(156-57)。作品の時代が女性に自立可能な職業を与えていなかったということを考慮しても、エドガの考えはやはり特異なものと言わざるを得ない。³⁾しかし、エドガはこうした自分の考えは至極当然のことと思っているばかりではなく、ウェイマ

スの主張にかかわってメアリを次のように説得する。

わたくしたちを喜ばせてくれた望みは潰えてしまいました。あなたはもとの貧乏な状態にもどり、針仕事によって不安定な生計を立てていかねばならないのです。

やむを得ぬ出費や生活様式の変化のためその一部がすでに使われてしまったのですから、全額を返還することは出来ません。その使った分に関しては、ウェイマスにたいするあなた自身の負債だと考えねばなりません。(156)

エドガは自分が公正公平で、正義に満ちあふれた人物であるかのような口ぶりである。続いてエドガはウェイマスの年老いた父や妻の窮状に触れ、7500ドルがいかに彼等にとって大切なものであるかを述べた後、「結婚はこれまで以上に遠のきました。愛するメアリがふたたび耐えねばならない苦しみを思うと胸が痛む」が「ウェイマスの主張の公正さに関してはまったく疑いの余地はありません」と断言するのである(157)。エドガにとっては結婚成立の第一条件が経済であることは明々白々である。経済的条件が整わなければ結婚はあり得ないのである。そうであるならば、エドガとメアリの結婚はウォルグレイヴの死によってはじめて可能となったということになる。なぜならば、「7500ドル」の「銀行通帳」の所在はウォルグレイヴが死ぬまで、メアリにとってもエドガにとっても「まったく知らないことであった」からである(143)。エドガとメアリが愛し合うようになったのは、ウォルグレイヴの死よりも以前のことであることは、経済的な障害が、ウォルグレイヴの「死によって思いがけないかたちで取り除かれた(155)」という説明からも明らかである。したがって2人の間に愛がないとは言えない。しかし、「富」と「富よりもなお素晴らしい贈物」(259)すなわち、クラリスをエドガに与えるつもりでアメリカに戻って来たというサースフィールドの言葉を25章の内容の一部として述べるエドガの無神経さは不可解としか言いようがない。この部分もメアリ宛の手紙の内容としてメアリ自身が読むのである。作者ブラウンの創作上の軽微な誤りとして見過すわけにはいかない。これはエドガという人物の人格の特異性と解釈せざるを得ず、エドガのメアリにたいする愛にも疑いが生じかねない。

ウェイマスの登場はエドガの結婚を不可能にただけではない。ウェイマスの登場後エドガは、2度目の、夢遊病の症状を示すのである。しかも1度目の屋根裏部屋にウォルグレイヴの手紙を隠してまた自室に戻るというエドガ自身の身体にはとくに危険を及ぼすことのない行為とは違って、2度目は洞窟の中で目覚めるのである。そして目覚めた後に「驚愕と恐怖に満ちた(158)」出来事を経験することになる。すなわちインディアンとの闘争である。

『エドガ・ハントリー』の副題は『夢遊病者の回想録』である。しかしエドガが夢遊病であることが分るのは13章である。それ以前に登場する夢遊病者はクリゼロウであり、エドガがそのことに気づく最初の人間である。クリゼロウが夢遊病者であると知った時エドガは、「安眠が出来ないことは心がひどく傷ついているしるしである(13)」と考え、また「夢遊病者の行為には常になんらかの意味がある(112)」と判断する。エドガのこの判断に従えば、夢遊病者エドガの心も「ひどく傷ついでい⁴⁾ることになるし、彼の夢遊病発症時の行為もまた「なんらかの意味」があることになろう。

エドガの心の傷は、生存中のウォルグレイヴが懇願していた、エドガの手元に保存されている

彼の「手紙と原稿(132)」の破棄をまだ実行していないことによるものである。この未だ不覆行の「義務」をはたさせるために、エドガの夢の中に「不安と怒り」の「感情」を抱いてウォルグレイヴが現れるのである(130)。おそらくはこの夢を見た直後にエドガは1度目の夢遊病を発症し、その中で、ウォルグレイヴの「手紙と原稿」を屋根裏部屋に隠したのである。このエドガの行為は、「義務」としての「手紙と原稿」の破棄の擬似行為である。

より症状に重い2度目の夢遊病発症は前述したようにウェイマスの登場後である。彼の突然の登場によってエドガは結婚がほぼ不可能になる。希望は絶望へと急変する。しかし、希望としての結婚の意味と目的はすでに検討したように、エドガにとっては、メアリの愛よりも、メアリが兄ウォルグレイヴから受け継ぐ遺産である。自分と2人の妹の経済的安定こそ、エドガにとって最も重要なのである。こうした希望が潰えたことにより、エドガは、伯父の息子による自分達の伯父の家からの追放を単に将来の不安としてではなく、さし迫った現実として認識しなければならなくなる。エドガは自分のことを「技工(115)」あるいわ「職人(116)」と称して「書き物机や用だんす(115)」を作ったことがあり、そうした「技工的才能」は「ずいぶん早い時期から顕著に現れていた」とは言うが(134)、そうした技術だけで生計を維持することは、彼の住んでいるノーワークではほぼ不可能である。しかし、エドガの生計維持を不可能にするのは、地理的条件だけではない。むしろエドガの経済的基盤についての基本的な考え方に問題がある。エドガは、これまでの習慣から自分にとって「労働」はメアリよりは「苦痛は少い」とは言うが、実は「働かなくても生活していけるだけの資産と安楽な生活に対する愛着、そして労役は我慢がならないという気持」はメアリ同様におそらくは彼の「体質」ともなっているのである(155)。エドガの両親はインディアンに襲われて「一人の幼児」とともに殺害され、「家は略奪されたうえ焼き払われた」のであるが(173)、このことがなければ、エドガが父の家を継ぎ、伯父の世話になることもなかったのである。しかし相続すべき一切の資産を失ったにもかかわらず、エドガ自身の考え方は基本的には何も変わっていない。父親を失ったエドガは妹2人とともに伯父の世話にならざるを得ないが、伯父に実の息子がいる以上、伯父の資産は当然のことながらその息子によって相続される。エドガと妹達の生活保証は伯父が生存中だけに限られる。その意味で、実の息子のいる伯父は、エドガにとって不安定で一時的な父親的存在でしかない。そこで、サースフィールドがその役割を荷うこととなる。最初はサースフィールドとエドガとの関係はもっぱら精神的なものである。サースフィールドがエドガの伯父の家に来て来た時は「富も友もない」状態であり、伯父の勧めで彼は「教師」として、「近隣の若者」を教えることになり、エドガも「彼の生徒」となる(93)。そしてやがて、エドガは「彼のお気に入りの生徒(97)」となり、エドガにとって、サースフィールドは「精神の親であり養育者(240)」の役割をはたすことになる。サースフィールドに再会した時にエドガは自分のことを「あなたの子供(242)」とさえ呼ぶ。一方サースフィールドの方はアメリカに戻って来た動機の一つとしてエドガによって「かきたてられた親としての愛情」に言及する(259)。そして、ロリーマ夫人と結婚したことで「富」を得ることになったので、エドガ達に経済的援助することが出来ると言った後、夫人がエドガを「息子として受け入れたいと願っている」とさえ言う(261)。ここにいたって文字通り、サースフィールドとエドガは父と息子の関係になろうとするのである。

しかし、ウェイマスが登場したことによりエドガはまさに絶望の淵に立たされるのである。メ

アリに対して、7500ドルをあきらめるよう説得するが、あきらめ切れないのはむしろエドガ自身であったろう。この無念と絶望の気持が2度目の夢遊病を発症させ、暴力と死の領域の入口である洞窟の闇の中へとエドガを導き入れるのである。

洞窟で目覚めたエドガの服装は、「シャツとズボン」だけで「靴と靴下」は履いていない(160)。この服装は、夜中に夢遊病状態で楡の木の下を掘っていた時のクリゼロウの「フランネルのようなもの」で腰から下を被っているが「体の他の部分」には何もつけていない「半裸状態」に準じるものである(10)。服装の歴史が人間の文化史の重要な一部を形成することからも明らかなように、衣服を身に付けることは、文明社会の象徴的行為である。したがって、衣服を脱ぐということは、文明状態から原始・未開への逆転を意味することにもなるが、クリゼロウの場合、理性で抑制されていた心の暗部、すなわちロリーマ夫人を死なせたという思い込みによる罪意識が露呈されたことの象徴としての「半裸状態」である。しかし、エドガの場合はより深刻である。1度目の時とは異り、2度目の夢遊病発症時、エドガは単に洞窟の中へ迷い込んだばかりではなく、洞窟内部の「窪み」あるいは「たて穴」へ「落下」するのである(163)。これは単に異った領域への移動ではなく、「落下」することによっていわば次元の違った世界にエドガは入り込むのである。落下した「たて穴」の中で意識が回復した時、エドガが「視力」を失ったのではないかと思えるほどの「なによりも濃密で深い闇」に包まれていた(160)。そして、その闇の中で最初にエドガが手を触れ、認識出来たものは「インディアンのトマホーク」である(161)。彼は最初自分の置かれている状況に絶望してこのトマホークを使つての自殺を考えるが、結局は豹を殺すことになり、その死骸を食べることで耐え難い飢えを満たす。この時、エドガは、飢えは、「時には親子の情をも打ち負かし、母親にわが子の肉を食らわせることがあるのだから、わたくしが野獣のまだ温かい血と悪臭を放つ内臓から顔をそむけなかったことは驚くにはあたらないでしょ(167)」と述べる。食欲を満たした後激しい腹痛に苦しみ、その苦しみが和らぎ、「深い眠り」に陥り、その眠りから目覚めた時、今度は「渴きの苦しみ」に襲われる(168)。エドガは、豹を殺したことは、「飢えからの解放という考えからではなく、自己防衛と無意識の衝動」によるものであり、腹痛を起すことが分っていたならば豹の肉を食べることをしなかったと述べ、自分が「先見の明もなく行動した」ことを認める(168)。しかし、エドガの置かれた状況では「先見の明」はもともと機能しないのである。闇の洞窟で豹に対応するには本能的な自己防衛の能力だけが有効であるし、生命の根源を脅かす「親子の情をも打ち負かす」飢えは人に、食物を吟味する余裕を与えることはない。渴きも、飢え同様生命の根源を脅す。渴きに苦しむエドガは渴きをいやすために別のトマホークで、インディアンの1人を殺すのである。この場合もエドガは「相手の生命を奪うこと」が自分の生命を守るための「唯一の方法」であったと自己防衛を主張する(179)。そして、「良心の呵責」を感じないわけにはいかなかったとは言ふものの、結局は「喉の渴きをいやすこと」が最優先であったことを認めるのである(179)。ここでは理性や良心よりも生命維持本能が優先的に機能するのである。

エドガは豹を殺すばかりではなくその肉で飢えを満たし、激しい腹痛を起し、痛みが和らいだ後「深い眠り」に陥る。「深い眠り」から目覚めたエドガを待ち受けていたのは、眠る前と同様「孤独と闇(168)」である。そして満たされた飢えにかわって「渴きの苦しみ」に襲われるのである。そして、豹を殺すという行為はエスカレートして、「これまで人間の生命を奪ったことは1度も

なかった(179)」エドガはついにインディアンを殺害するのである。エドガがインディアンの姿を見たのは、希望と絶望の間を激しく揺り動かせられながら、必死の努力の末、やっと洞窟の出口にたどりついた時である。「むき出しで、異様な模様の彫りもののある」数本の「脚」を見て、インディアンではないかとの「疑い」を持った時、エドガは、「驚きと恐怖」の感情を抱く(171)。そして、「何か不思議な力がわたくしを地上からかささらって、一瞬のうちに、荒野の中心に放り込んだのか？ わたくしはまだ父祖の居住地にいるのだろうか、それとも何千マイルも離れた所にいるのだろうか(171)」といぶかる。洞窟という「牢獄(171)」から抜け出したと思った瞬間に、エドガは「野蛮人(173)」の活動する、暴力と死の支配する「荒野」に放り出されたのである。エドガの真の試練は、まさに、「牢獄」を抜け出した瞬間から始まるのである。洞窟の間は正義と邪悪、慈悲心と暴力、生と死、文明と未開の分岐点にすぎないのである。

エドガが洞窟で目覚めるまでの章に関して整理すれば、1章から3章までの主たる内容は、ウォルグレイヴ殺害という邪悪で不正な行為の張本人を見つけ出し、犯人に対して復讐する、あるいは正義の名のもとに裁くというエドガの意思と被疑者の発見である。

4章から8章まではクリゼロウの告白であるが、そこで強調されるのは慈善や恩恵である。クリゼロウが母とも慕うロリーマ夫人の特徴は「慈善(41)」と「優しさ」と「正義」(48)である。子供であったクリゼロウを見込んで、彼女は彼の面倒を見ることになる。ロリーマ夫人が心を尽くして面倒を見るのは、クリゼロウだけではない。悪意の象徴とも思える彼女の双子の弟アーサー・ワイアット、ワイアットによって土地から追われる夫人の意中の人サースフィールド、さらにはワイアットが誘惑した「若い女(49)」に生ませたクラリスも、ロリーマ夫人の「慈善」と「優しさ」の対象である。

9章から13章までは、クリゼロウの告白を聞いた後のエドガのクリゼロウに向けられる「慈悲心」の話が中心となる。

クリゼロウが自己防衛のためにワイアットをピストルで撃ち殺したことをエドガは自衛行為として納得する。そして弟の死を知ったロリーマ夫人が絶望のため、死んでしまうだろうから、眠りから永遠に目覚めないようにするのが自分のなし得る「善(82)」であるとするクリゼロウの考えをエドガは、「一時的な狂気」と「誤った慈悲心」にもとづくものであると判断する(91)。しかし、同時に「彼の意図は気高く思いやり深いものでした(92)」とも言う。そしてそのことで「罪」をまぬがれることはないにせよ、クリゼロウの判断の誤りは「自然が人間の能力に与えた限界」にその原因があると判断し、クリゼロウを弁護するのである(92)。

13章は、実際には、ウォルグレイヴの人となりや彼の「手紙と原稿」にまつわる話が中心内容ではあるが、同時にエドガのクリゼロウに対する「慈悲心」についても言及され、この「慈悲心」は、クリゼロウの死まで中断されることはない。

14章はウェイマスが自ら語る内容で占められるが15章はウェイマスの話と、それに対するエドガの反応がその内容となる。すでに見たように、エドガは公正な態度をとるようメアリを説得する。しかしその一方エドガは結婚が不可能になったことと同時に、彼と妹二人の「生活が1人の老人〔伯父〕の生命に左右される」こと、そして「伯父の死によって資産は息子に渡り」、「その息子」は彼等にとっては、「他人であり敵」であり、「第1番にやること」は「疑いなく」彼等3人を「家から追い出すこと」であると判断するのである(156)。つまりエドガ兄妹はこれまで伯

父から受けていた慈悲心の恩恵を受けられなくなることを否応なく認識させられる。こうして次章16章から、エドガは「慈悲心」や「慈善」とは無縁の闇と暴力と死の世界へと「落下」するのである。

17章から始まるインディアン殺害の正当性を、自分の若年期の恐怖の体験と彼が置かれた状況に求め、決して「性格」が「残忍残酷な」わけではないとエドガは弁明する(178)。しかし、インディアンは、エドガにとっては、彼が洞窟で殺した豹と同じく「荒野」の野獣であって、両者の間には「慈悲心」や「善意」の介入する余地はない。

5人目のインディアンを殺す時、エドガは、銃のねらいをはずしたため、「もだえ苦しむ」相手にとどめの1発を撃ち込むことは「深い同情心と義務の命ずるところ」(201)であり「哀れみ(202)」の行為であるとする。そして2発目も十分にその目的を達することが出来なかった時、彼は、「銃剣」で相手の心臓を突きさしてとどめを刺し、その行為を「残酷な慈悲の行為」であると(202)。こうした自分の行為がもたらす恐ろしさに「圧倒され」て、「武器を放り出し地面に身を投げ出す」一方、「こうしたことは人間の邪悪な本性が、何千という理性的な存在としての人間にすることを強い、目撃することを強いる行為である」と述べる(202)。そしてその「行為者」、「目撃者」の態度は、「熱烈で喜びに満ちた」ものであると判断する(202)。以上に見られるごとく、ウェイマス登場後のエドガは、「人間の邪悪な本性」が圧倒的な力を振う領域に、夢遊病症状という無意識状態で迷い込むのである。この精神的、物理的「荒野」の領域は、エドガにとって「どのように想像力を働かせても思い浮べることが出来ない」ような「未開の荒涼このうえない」、「まったく見覚えのな」いものである(181)。そして、この領域の住人インディアンは「野蛮人(32)」である。この「野蛮人」はルソー的な「高貴な野蛮人」ではない。「略奪と人殺しをする」存在として、その姿はエドガに必ず「身震い」を起させるのである(173)。インディアンを「略奪と人殺しをする」存在にした原因をエドガが知らないわけではない。「長きに亘る侵害と侵略がインディアン諸部族を激怒させた」ことを彼は「知っている」(173)。デブという老女の出身部族「デラウエア族」は「イギリス植民者達の絶え間ない侵略行為の結果」、「先祖伝来の居住地を明け渡した」こと、そして、その部族の「住んでいた村」は今ではエドガの伯父の「裏庭と果樹園」になっていることをエドガは知っているのである(207)。さらには、デブが、「イギリス人」は「異人」であり「逗留者」であり「彼女の黙認と許可」によって「土地を使用してい」るにすぎないと考えていることも、エドガは承知している(208-209)。こうしたエドガの理解は「新大陸」アメリカの文明が、先住民の迫害追放の上に成立していること、アメリカの現実そのものが悪夢的な要素を内包していることの確認でもある。したがって、16章から始まるエドガの恐怖の体験は、エドガ個人の心の内奥への冒険であると同時に、アメリカの現実そのものの探究ともなるのである。

17章で5人のインディアンを目撃したエドガは、19章まででその5人すべてを殺害する。最初の1人はトマホークで殺し、最後の1人は、前述したように2発の銃弾でも死ななかったために銃剣で止めを刺すのである。(後にサースフィールドが発見したこのインディアンの死体は「銃剣と弾丸でずたずたになっていた(255)」。)そして、そのインディアンの「トマホークを戦利品」とし、その「マスケット銃を地面に突き刺し、道路の真中に直立させたままにしてお」くのである(203)。これはまさにエドガのインディアンに対する勝利宣言、勝ち誇りのしるしである。この時点でエド

ガはもはや彼が言うような「敵対行為に不慣れで、武器も与えられていない、軽率で臆病な若者(202)」などではない。エドガの目が捕えた5人目のインディアン⁵⁾の動きは「獣の動き」のようであり、「別の状況であったら、ただちに、狼か、豹かあるいは熊だと思ったかもしれな」いのであり(199)、まさに、エドガの「敵(200)」なのである。インディアン殺害に対する弁明のすべては、メアリの反応を考慮してのことであり、エドガの「復讐心に満ち、情容赦のない、残忍凶暴な精神」は、彼の言うような、「最近起った類例のない出来事」(192)によって引き起された一時的なものではない。この精神状態は、彼の精神の常態となっているのである。

20章では、5人のインディアンを殺害した後、生れ故郷のソウルベリをめざすエドガの決意表明がなされ、すでに触れた、植民者とインディアンの争いの根本原因が明らかにされる。そして「肉体」は「哀れな状態」にあっても故郷をめざすエドガにとって最も必要なものは、「理性的存在である人間と獣を区別するものと、両者に共通するもののすべての点で、他のすべての生き物を凌駕する(212)」能力である。他人への配慮はそのまま自己の死に直結する状況に置かれているエドガにとってはただ自分の持つ能力にすべてをかける以外に方法はないのである。

こうした生か死かという極限に近い状態の中、21章で、エドガは、インディアンと見誤まって、父とも慕うサースフィールドに向って「発砲」し、銃を捨て、「川」へと飛び込む。そして水面に浮び上るや否や「20発の弾丸」が彼に向って発射される。(221)ここでは、敵味方の区別も定かではない。正確な判断をする余裕すらない。守るべきものはただ1つ自分の命であり、その目的を達成するためにはあらゆることは犠牲にされねばならないのである。「善意」や「慈悲心」の入り込む余地はない。

続く22章の第3パラグラフで、エドガは16章からこれまでの体験を簡潔に振り返る。

たしかに、わたくしの運命に匹敵するものはありません！ この一連の苦難と危険はどこで終るのでしょうか？ 1つの災難を切り抜けると次の災難に襲われる。地中の身の毛もよだつ闇の中から抜け出たと思うと極限の飢えに耐え、野獣の牙と対決する。こうしたことから解放されたと思うと今度は野蛮人の直中に投げ込まれ、わたくしの内臓を賞味し、心臓の血を飲み干したいという欲望を持つ殺人の熟練者達との果てしのない絶望的な戦いをしなければならぬ。こうしたことから逃れたと思うと次は川の深みで命果て、人跡まれな岸辺に打ちあげられるか、人の好奇心も憐れみも届かぬ遠くへ押し流されてしまうしかない。(223-224)

これはまさに悪意と憎悪、殺すか殺されるかの世界である。しかし、この領域をまだエドガは抜け出してはいない。⁵⁾ やっと見つけた家は「セルビイ家の住居」であり、主は酔っ払って狂暴になっていて、みじめな「妻をベッドと家から追い出し、彼女は彼の乱暴狼藉を恐れて、いたいけな幼児を連れて、納屋に逃げ込んでい」るのである(229)。当がはずれて、エドガは立ち去るが少し歩いた所で、「トマホークで切りさいなまれた若い女の死体」を見る(230)。そして「彼女の頭皮」が「戦利品として保存するために剥ぎ取られていた」(230)ことで、犯人がインディアンであることを知る。

さらに道を進んだ所で、エドガは1人のインディアンの死体を発見する。そして、「いまや持

主のいなくなったマスカット銃を奪っ」て森の中へと急ぐ(231)。この時点でエドガは、「恐怖の光景」に慣れて、「無感覚で無感動になってしまった」ことを自覚する(231)。このことは、エドガ自身がいかなる残虐行為も出来る精神状況にあることをも意味し、実際に彼は、豹を殺し、その肉を食い5人のインディアンを復讐と憎悪の念を抱きながら殺害したのである。インディアンを「野蛮人(32)」と呼ぶエドガ自身がすでに「野蛮人」となっていることの何よりのあかしである。

23章で、エドガは自分の地理的「位置」が少し分ってくる(232)。そしてそれと同時に途中で出会ったピセットの話から推測して彼自身および彼と係わりのある人物の様子も徐々にある程度まで明らかになってくる。しかし一方インディアンにより1人は伯父とともに殺害されもう1人は捕えられたという妹達についての誤った推測により絶望的にもなる。そして、「生得の際限のない残虐性」を持った「野蛮人」というインディアンのイメージをエドガは完成させる(235)。その後エドガは知り合いの家に入り、その留守中の家の2階に上り明りのついた部屋のテーブルの上に紛失したと思っていたウォルグレイヴの「手紙」を発見する(239)。驚きの感情が冷めやらぬ間に、階段に足音を聞く。「足音」の主は、エドガの「精神の父であり養育者、若き日の友であり教師であり、別れてから幾年もの歳月が過ぎ、二度と会うことはあるまいと思っていた(240)」サースフィールドである。サースフィールドはロリーマ夫人の「慈悲心」の恩恵を受けた人物のうち、夫人の期待に応えたほとんど唯一の人間である。絶望状態の中でのこの再会によって、エドガは、サースフィールドからエドガ自身が抱いていたすべての疑惑と謎についての説明を受け、自分の置かれていた真の状態を理解する。24章がその内容を示す最初の章である。

エドガはサースフィールドによって、妹2人の無事と彼等の運命を左右する人物、すなわち伯父の死を確認する。前述したように伯父の「寛大さに依存して生きている人間(234)」である彼等にとって、伯父の死はすなわち伯父の息子による彼等自身の追放を意味する。エドガは自分達の置かれた絶望状態を父的存在であるサースフィールドによって確認させられるのである。しかし、伯父の死は行方不明のエドガの「搜索(249)」中に起ったことである。しかも、伯父は、サースフィールドがエドガに贈った銃を手にし、その銃で、インディアンに最初に攻撃をしかけ、闘いの中で亡くなった「唯一の人間」となったのである(244)。エドガの行方不明の原因とウォルグレイヴの手紙の紛失の原因がエドガの夢遊病であることが判明するのもこの章である。最終判断そのものはサースフィールドによってなされるが、正しい判断のもとになる重要なヒントは伯父自身の口から語られる、エドガは「眠っていて、自分が何をしているのか分っていなかった(299)」という言葉である。この言葉によってサースフィールドの「無知」と「疑惑」に光が射すのである。こうした一連の事実は、現実的にエドガに対して父の役割をはたしてきた伯父がその役割をサースフィールドに引き渡すことを意味する。サースフィールドはエドガにとって、単なる「精神の父」であるばかりではなく、次章で明らかになるごとく実質上の父となろうとするのである。銃の持主の移動もこのことをはっきりと示している。サースフィールドがエドガに与えた銃は、伯父の武器となり、伯父の死によってインディアンに奪われ、続いて洞窟でエドガがインディアンから取り返し、インディアン殺害に使用される。その後、この銃でエドガはサースフィールドの服の「袖」に「穴」を開け(257)、銃を放棄して川に飛び込む。残された銃をサースフィールドが手に入れる。この銃は「2つの銃身」のある「普通のマスカット銃よりも軽くて

小さい」ものであり(185)、「狩猟用ではなく戦闘用に作られた」もので先端に取り付けると「銃剣」としても使用可能なように「短剣の刀身が備わっている」のである(187)。エドガはこの銃に備わった機能をすべて使って、インディアンを撃ち殺し、刺し殺したのである。しかし、この銃による殺害はインディアンばかりではない。この銃を手にした伯父がエドガ捜索の途中で死んだということは、間接的にはエドガによる伯父(物質的な面を支える父的存在)殺害ともなる。さらにこの銃は前述のように、「精神の父」としてのサースフィールドにも向けられた。実際には、サースフィールドは、傷一つ負うわけではなく、またエドガの判断の誤りによるものとは言え、父殺しを十分に示唆するものである。このエドガの行為が持つ父殺しの要素は、エドガの好奇心をかき立て、彼の慈悲心の対象となり、彼を洞窟へ導く役割を務めたクリゼロウにも形を変えて、見られるものである。クリゼロウは、実の父母が健在であるにもかかわらず、またロリーマ夫人も実の息子がいるにもかかわらず、そして両者は形式上は、主人と使用人であっても、実質的には母と息子というのに近い関係になっている。(この関係は、ロリーマ夫人が双子の弟アーサー・ワイアットの娘クラリスを引き取った後、クラリスとクリゼロウの結婚を実現させようとする時、文字通り母と息子の関係となる)。こういう関係の中でクリゼロウはロリーマ夫人を「誤った慈悲心」によって殺害しようとする。この試みは失敗するが、ショックによってロリーマ夫人を死なせてしまう(少くともクリゼロウはそう信じる)。この母殺しに先立って、クリゼロウは、父殺しも行う。そしてこれは、現実になされる。すなわち、ワイアット射殺である。もちろんこれは意識的なものではない。自己防衛からのやむをえない行為である。しかし、ワイアットはクラリスの父であり、クリゼロウとクラリスの結婚が実現すれば文字通りワイアットはクリゼロウの父となるのである。このことはクリゼロウの「わたくしは愛する人[クラリス]の父」を「殺した」(74)という言葉でも明らかである。つまりクリゼロウは父と母とを殺して、アメリカに逃げてきたのである。

サースフィールドがアメリカに戻って来た動機の1つは、富とクラリスをエドガに与えるためであった。これが実現すれば文字通りサースフィールドはエドガの父になる。なぜならばサースフィールドはロリーマ夫人との結婚によって、クラリスの父親役を務めているのであり、エドガとクラリスの結婚が成立すれば、当然の結果としてサースフィールドはエドガの義父となる。サースフィールドが父になるならば、ロリーマ夫人は当然エドガの母となる。またサースフィールドによれば、夫人はエドガを「息子」にしたいという願いを持っているのであるからそれが実現すれば文字通り夫人はエドガの母となる。サースフィールドとロリーマ夫人の結婚は、クリゼロウがアメリカに逃げて来た後のことであるが、それ以前アイルランドにいる時に成立する可能性は十分にあった。なぜならば、サースフィールドは、ワイアットによって追放され、外国での長年の放浪生活の後、ロリーマ夫人と再会して、彼女の援助を受けることになったからである。したがって、サースフィールドはクリゼロウの父になる可能性もあったということになる。

人間関係を、可能性を含めて、このように考えれば、エドガとクリゼロウの類似性は、単に夢遊病と箱作りの技術に関してだけではないことになる。つまり、エドガとクリゼロウはサースフィールドとロリーマ夫人という共通の父と母を持っているのである。そしてエドガもクリゼロウも父と母を殺そうとすることも類似する。すなわち、クリゼロウは、父としてのワイアットを実際に殺し、母としてのロリーマ夫人を殺そうとした。一方エドガは、父としての伯父を間接的に殺し、父としてのサースフィールドを誤って殺そうとした。そのうえ、エドガは、ロリーマ夫

人が生きてニューヨークにいることを知らせることで、クリゼロウに再度夫人殺害を企ませることで、間接的に殺害の意図を示すのである。

以上のことから明らかなように、エドガとクリゼロウの最も重要な共通点は親殺しである。そしてこの同じ人物を親殺しの対象にするという点で、一見無関係に思えるクリゼロウの物語りとエドガの物語りは見事に交わるのである。

親友であり許婚者の兄であるウォルグレイヴ殺しの犯人捜しで始まった物語りは、インディアンとの闘争物語りを経て、親殺しの物語りで終るのである。この一連の物語りでは善意や慈悲心は、何の役にも立たないばかりか、悪を増長させるのである。ロリーマ夫人の「慈悲心」と寛大さは弟ワイアットを罪人とし、結局は死に至らしめ、クリゼロウには「誤った慈悲心」を植えつけその「誤った慈悲心」によって、彼女はクリゼロウに命を狙われることになるのである。エドガのクリゼロウに対する慈悲心や善意もまったくプラスの作用はせず、クリゼロウ自身が批判するように、クリゼロウの人生に「悲惨な終末(36)」をもたらしめたのである。こうしたエドガのクリゼロウに対する異常なまでの善意は、両者の類似性を考慮すると、エドガ自身が受けたいと望んでいる善意を十分に受けることが出来ないという事実の反動かもしれない⁶⁾。それはともかく、エドガの異様とも思える善意は、クリゼロウに再度ロリーマ夫人の殺害を決意させる。そして、遂には、ニューヨークから、狂人として「ペンシルベニアの病院(292)」へ移送される途中で、クリゼロウは「船外に身を躍ら(293)」せて死んでしまうのである。エドガのクリゼロウに対する善意の結果はこれだけにとどまらない。クリゼロウがニューヨークへ向ったという内容のエドガからサースフィールド宛の手紙を見たロリーマ夫人はショックで体調を崩し流産する。生れるはずだった子供は、いわば2人の命の象徴であり、その意味で子供の死はサースフィールドとロリーマの比喩的な死でもある。エドガは遂に親殺しを完遂させたのである。サースフィールドは手紙の中でエドガの「軽率さ」と、「忠言」を受け入れなかったことを非難した後、「今後のもっと慎重かつ従順になるように」と諭す(292)。しかし、自分の誤ちは「邪悪なあるいわ悪意の意図からのものではなく」「強大な慈悲心」(290)に発したものと弁解するエドガにはサースフィールドの忠告は通じることはないであろう。エドガには経験から何かを学ぶ能力はない。エドガにあるのは自己正当化の能力だけである。エドガは同じ誤ちを繰り返す。エドガに信念があるとすれば、クリゼロウと同じく、それは慈悲心や善意に対する狂信である。クリゼロウはその狂信ゆえに死を選び取らねばならず、エドガはすでに伯父を失っており、後はメアリを、そして、サースフィールドから与えられたであろう「富」とクラリスをもおそらくは失うのである。しかし、エドガの愚しさと不可解さは、誇張されたものではあるが、人間そのものが持つ愚しさと不可解さと無縁ではない。『エドガ・ハントリー』でブラウンは、いかに人間は経験から学ぶことが少いか、ナイーブな慈悲心や善意への信仰がいかに悪を生み出すか、そして人生がいかに闇の迷路に満ちているかをエドガの物語りとクリゼロウの物語りを交差させることによって示したのである。

注

- 1) Charles Brockden Brown, *Edgar Huntly or Memoirs of a Sleep-Walker* (Kent State University Press, 1984), p. 5 以下作品からの引用はすべて、これにより引用末尾に頁数のみを示す。

- 2) ウォルグレイヴのこの一種のうさんくさは、エドガ自身も自覚しているように、インディアンの領土の略奪によって成立したアメリカそのもののうさんくささの反映かもしれない。
- 3) エリザベス・ジェイン・ウォール・ハインズは、エドガはハントリー農場で、「有閑階級」として教育を受けていると述べる。兄がそのような教育を受けているとすれば、妹二人も、メアリ同様に、生活のために働くことを厭うのであろう。

Elizabeth Jane Wall Hinds, *Private Property: Charles Brockden Brown's Gendered Economics of Virtue* (Newark: University of Delaware Press, 1977), p. 139.

- 4) ポール・ウィザリトンによれば、ケネス・バーナードは、ウォルグレイヴを殺害したのはインディアンではなくエドガであると考える。

Paul Witherington, "Not My Tongue Only': From and Language in Brown's *Edger Huntly*", Bernard Rosenthal ed., *Critical Essays on Charles Brockden Brown* (Boston: G. K. Hall & Co., 1981), p. 167.

エドガ犯人説に関しては、グラボウは、エドガがインディアンの老婆にクイーン・マブという名称を与えたこととインディアン側の白人殺害の意志との関連性を指摘し、「エドガは少くとも象徴的には、ウォルグレイヴ殺害の背後の力となっている」と述べる。

Norman S. Grabo, *The Coincidental Art of Charles Brockden Brown* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1981), p. 78.

- 5) ノーマン・S・グレイボウはエドガの荒野から居住地への帰還を、「無知から知識、生存闘争から平穏、孤立から社会、狩猟から農園」への移動でもあると述べる。(Ibid., p. 63.) しかし後にも触れるが、エドガは経験から何も学んではいない。また居住地に戻ったエドガを待っていたのは、「飢え」である。なぜならば、彼は伯父の死により、それまで受けていた経済的物質的援助を失い、いわゆる路頭に迷う身となるのである。社会は彼にとっては第2の荒野である。
- 6) エドガはクリゼロウの告白を聞く前に、クリゼロウをウォルグレイヴ殺害の犯人と断定して、「父の寛容さを持つように努め、この不幸な男に、純潔と平穏を取り戻してやることがわたくしの本務(33)」であると考えた。したがってエドガはクリゼロウと自分との類似性を知る以前に父的存在(=慈悲心・善意を付与する存在)になろうとしていることになる。しかし、その隠れた動機は、筆者が本文で示したのものになると思われる。